

特別支援学校教師がもつ自立活動における重度・重複障害児の自立と主体性のイメージ

油目 未帆

I 問題

重度・重複障害児とは、文部省(1975)の特殊教育の改善に関する調査研究会の中の「重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について」によると、学校教育法施行令第22条の3に規定する障害をあわせ有する他に、発達の側面から見て「精神発達の遅れが著しく、ほとんど言語を持たず、自他の意思の交換及び環境への適応が著しく困難であって、日常生活において常時介護を必要とする程度」の者などとされている。肢体不自由及び病弱の特別支援学校に在籍する重度・重複障害児は、大島(1971)の分類では、IQ35以下で寝たきり又は座位が可能なレベルの子どもたちが中心ある。

教師が重度・重複障害児の教育の中心となる自立活動の指導を行う際、自立の姿や主体的に取り組む姿をどのようにイメージし、個の目標をはじめ、指導計画立案や授業実施の際の配慮・工夫をどのように行っているかを明らかにし、対象児が自立を目指し、より主体的に取り組める自立活動の在り方を検討することは意義あることと考える。

II 目的

特別支援学校の自立活動において、重度・重複障害児が自立を目指し、主体的に取り組める自立活動の指導について検討するため、以下の点を明らかにする。

- 1 担当教師が重度・重複障害児の目指すべき自立の姿をどのようにイメージし、目標設定をしているのか
- 2 担当教師が重度・重複障害児の主体的に自立活動に取り組む姿をどのようにイメージしているのか
- 3 重度・重複障害児が自立を目指し、主体的に取り組める授業実施の際の配慮・工夫について

III 研究 I

1 予備調査

1) 目的

本調査で用いる質問項目の確定のために、暫定質問項目を作成し、内容的妥当性を検討する。

2) 調査方法

現職派遣院生等への面接の結果と大分県立鶴見養護学校(1997)、新潟県立柏崎養護学校(2007)、赤澤(2001)を参考にして作成した暫定質問項目について、近隣の特別支援学校教師に作成した項目の表記上の問題や内容が分かりにくい項目を指摘してもらった。

2 本調査

1) 目的

担当教師がもつ自立活動における重度・重複障害児の自立の姿と主体的に自立活動に取り組む姿のイメージ、主体的に取り組むための授業実施の際の配慮・工夫を明らかにする。

2) 方法

全国の特別支援学校のホームページ上で重度・重複障害児対象の自立活動を主とする教育課程があるとしていた、179校の小・中・高各学部当該課程担当教師に郵送による質問紙調査を行った。調査は、2010年7月下旬から9月下旬に実施した。

3) 調査内容

予備調査で確定した以下の質問項目。

- (1) 担当教師の所属学部及び想定した重度・重複障害児の障害の程度
- (2) 重度・重複障害児の「自立の姿」についてのイメージの有無及び具体的にイメージした姿
- (3) 重度・重複障害児の「主体的に自立活動に取り組む姿」のイメージの有無、及び具体的にイメージした姿
- (4) 自立活動において重度・重複障害児が主体的に取り組むための授業における配慮・工夫
- 4) 分析の視点

表1 最重度の児童のコミュニケーションに関する「自立の姿」

複数回答(N=22)	
項目	回答数
小学部卒業後を見通した場合	5
・目や口を動かして(思いを)表出する	
・自分の意志を左手をあげるか、目の動き、声をだすことなどで表現できるようになる	
・身近な相手から呼びかけられたり働きかけられたりしたことに対して表情(視線)、身体の動き(手)で応える	
・周囲の大人や友達とのかかわりの中で、楽しいことやうれしいことを感じて笑顔になったり、初めての経験や苦手な事には緊張したりして心を動かすこと	
・かかわり手の支援を受けたり代替コミュニケーション機器を利用したりすることによってそれ(思い)を表現すること等	
中学部卒業後を見通した場合	2
・ベッドを訪れる方々(保護者や看護師、教師等)にたくさん声をかけてもらったり身体を触ってもらったりして、それを感じ、おだやかに(快の状態で、自分の気持ちを表情や発声で表現することができる等	
高等部卒業後を見通した場合	5
・人とかかわりややりとりの中で、快や不快の気持ちを表情や身体の動きでたくさんあらわせるようになる	
・自分で意思を伝える	
・自分の思いを伝えているいろいろな人と積極的にかかわる	
・他者を受け入れられる	
・自分の思い、気持ちを伝えられる	
今から3年後くらい見通した場合	2
・自己の感情の表現ができたとき	
・教師からの働きかけを受け入れ、表情や目・口の動きで表出できる等	

「自立の姿」のイメージ、「主体的に自立活動の授業に取り組む姿」のイメージについては小学部、中学部、高等部の学部別、想定した子どもの障害の程度別に分類して整理した。

5) 結果と考察

(1) 回収率

179 校中に調査協力依頼を行い、81 校から協力

表2 最重度の児童の「主体的に取り組む姿」のイメージ

複数回答(N=21)	
項目	回答
コミュニケーションの表出	14
・目や口をわずかに動かして表出する	
・自分の意思を目の動きや表情で伝え	
・自分で伝えられる方法(視線、手の動き)を活用して活動に取り組む姿	
コミュニケーションの受容	6
・様々な刺激を嫌がらない	
・教師の働きかけ、支援に慣れる	
・拒否反応を示さず受け入れる	
自主的な動作	11
・自分から身体を動かそうとする	
・朝の会に参加したり、体操をする	
・姿勢変換の際、言葉かけを聞いて、教師と一緒に腕・足や体幹を動かす	
その他	11

可との回答を得た。81 校中 73 校(90.1%)206 名から回答があり、192 名を有効回答とした。

(2) 結果及び考察

① 「自立の姿」のイメージ

小学部 57 名(81.4%)、中学部 52 名(82.5%)、高等部 54 名(91.5%)がイメージをもっていると回答しており、いずれの学部においても 8 割以上の教師が自立の姿をイメージしていることが分かった。

また、想定した子どものいつごろの姿を「自立の姿」としてとらえていたかについては、どの学部でも障害程度別にみても、高等部卒業後をイメージしている場合が多かった。

「言語理解・寝返りいずれも困難」である最重度の子どもを想定した場合、58 名(84.1%)のケースで、また、「簡単な言語理解・寝返りいずれも可」の子どもを想定した場合は、45 名(77.5%)のケースで自立の姿のイメージをもっていることが分かった。最重度の子どもの場合でも大半の教師が自立の姿のイメージをもっていることが明らかになった。

具体的な姿として、最重度の子どもの場合、「教師からの働きかけを受け入れ、自己の感情の表現を表情や目・口の動きで表出できる」等コミュニケーションに関する内容(表 1)のほか、「定期的な帰省ができ、好きなことを時々楽しむことができ

る」等があげられた。また、「言語理解・寝返りいずれも可」の場合、「誰かの支援や社会福祉サービスを利用しながらの社会自立ができればいい」等があげられた。

②「主体的に取り組む姿」のイメージ

小学部 59 名(88.1%)、中学部(82.5%)、高等部 51 名(86.4%)がもっていると回答した。

障害程度別で見ると、「言語理解・寝返りいずれも困難」である最重度の子どもを想定した場合、54 名(78.2%)のケースで、また、「簡単な言語理解・寝返りいずれも可」の子どもを想定した場合には、54 名(91.5%)のケースで「主体的に自立活動の授業に取り組む姿」のイメージをもっていることが明らかとなった。具体的なイメージとして、「コミュニケーションや動作に関する内容」等があげられた(表 2)。

(3) 授業における配慮・工夫

教材・教具の工夫に関する内容が多くあげられた。また、その他に、「子どもの出すサインの見とりに関する内容」、「言葉かけなど教師の働きかけに関する内容」があげられた。

IV 研究Ⅱ

1 目的

自立の姿のイメージと自立活動の授業との関連、授業実施の際の主体的に取り組むための具体的な配慮・工夫を事例的に明らかにする。

2 方法

自立の姿、主体的な姿を具体的にイメージしていた A 特別支援学校教師に半構造化面接による聞き取り調査を 12 月上旬に行った。

3 調査内容

1) 授業と「自立の姿」の関連付け及び授業における、主体的に取り組むための具体的な配慮・工夫の一例について

2) 「自立の姿」のイメージの見通しのもち方について

4 結果と考察

A 校では、「自立の姿」と自立活動の指導の授業を関連させ、授業に取り組んでいることが明ら

かとなった。具体的には、「保護者や学校教員以外の人からの支援を受け入れ自分の思いを何らかの手段で伝えることができる、構築できる姿」という姿の実現に向けて、あえて、その子どもが興味をもっている歩行器を遠くに置いて、寝返り、ひじばいで動きを引き出すということをしていた。

また、環境設定について、注意が転動しやすい子どもであるが、個室にする等、特殊な環境の中で授業をするのではなく、社会に出た時をイメージされて授業をしていることが明らかとなった。

また、「自立の姿」のイメージの見通しについて、高等部卒業後はイメージしにくいのが、教師同士で話し合ってイメージを共有し指導することが重要であることが分かった。

V 総合考察

研究Ⅰでは、重度・重複障害児の「自立の姿」のイメージ、「主体的に自立活動に取り組む姿のイメージ」について、約 8 割以上の教師がもっていることが明らかとなった。重度・重複障害児においても、「自立の姿」のイメージをもつことや「主体的に自立活動に取り組む姿」のイメージをもって授業をできることが明らかとなった。

研究Ⅱでは、「自立の姿」のイメージと自立活動の授業を具体的に関連付けていることが明らかとなった。教員の間で、卒業後の姿のイメージを共有し、授業をしていた。

主体的に自立活動の授業に取り組むためには、今、現在の姿だけではなく、「自立の姿」のイメージをもちながら授業をすることが大切である。

文献

- 赤澤信一(2001) 知的障害養護学校教師の指導に関わる時間的展望. 上越教育大学修士論文.
新潟県立柏崎養護学校(2007) 研究紀要.
文部省(1975) 重度・重複障害児の学校教育の在り方について(報告).
大分県立鶴見養護学校(1997) 1997 年度特殊教育実験学校 2 年次主体的に活動する姿を求めて - 重度・重複障害児の指導について -. 大分県立鶴見養護学校研究紀要.
大島一良(1971) 重症心身障害児の基本的問題. 公衆衛生, 35, 648-655.